

ザンビアツアー体験記 (C.N)

「ザンビア？それどこにあるっけ？」

ザンビアに行く、という話をしたとき、多くの人から首をかしげられました。ケニアや南アフリカ共和国など有名な国ならまだしも、特に接点がなければアフリカ南部の一国ザンビアに注目することはないでしょう。私自身も中高生の頃はアフリカのどこにどんな国があるのかよく知らず、「アフリカ」と一括りに考えてしまいがちでした。「将来は国際協力に携わる仕事がしたい」と考えるようになってからも、各国の文化や政治、経済などの特色を把握しないままに漠然と「アフリカへ行ってみたい」と思うばかりでした。しかし、ロシナンテスの活動にインターン生として参加するようになり、漠然としていた「アフリカで国際協力をする」という希望は、少しずつ具体的な将来像として描けるようになりました。今回のスタディーツアーにも参加する機会を得たことで、さらに様々な知識を吸収し、自身の進路を深く考えることができました。



ルサカ市内のショッピングモール

ザンビアは治安が比較的安定しており、気候もほどよく、首都ルサカでは様々なショッピングモールやホテル、博物館などが揃い、想像以上に快適に過ごすことができます。旅立つ前に漠然と予想していたこととは異なり、今回のツアー中に極度の貧困で苦しむ人々を日常的に目にするようなことはありませんでした。

それでも、時々「あれ？」と思う瞬間に出会うことができました。絡み合う何本もの電線や機能していない信号機、路上での車への売り込み、そして「マザーシェルター」へ行くまでの未舗装の道…。いずれも途上国にはよくある光景ですが、時には事故の原因になることもあります。これらのように生命に関わるほどでなくても、将来的には改善すべき状況を各所で見ることはできたのは、現地を訪れたからこそのことでした。同時に、「その対処すべき問題を、誰がどのように、解決するのか」を考えることができたのも。



ルサカ中心部の道路の様子

私たちにとって、途上国での暮らしは無数の「あれ？」と思う瞬間、「不便だな」と思う瞬間にあふれていると思います。でも、現地の人々はこれらの「当たり前」の上に、逞しくも生活を成り立たせている。多くの人が、毎日のように大小様々な問題に直面しながらも、臨機応変な対応力と意志の力で普通に生活している。そのことを踏まえると、途上国が抱える問題の全てを外部からの介入で解決すべきものと見なすことは到底できない、と改めて感じました。「公的な制度が導入されなければ、あるいはお金や物、サービスが入ってこなければ、人々は困窮したままである」とは限らないことを胸に刻んでおく必要があるでしょう。

その点で、ロシナンテスの事業地に足を運び、また職員の皆様とたくさんお話をする機会を得られたことは、自分にとって大変意義のあることでした。

具体的な内容を知ることによって事業そのものに対する理解が深まったのはもちろんですが、最も印象的だったのはロシナンテスの日本人職員の皆様と、現地職員の皆様、診療所の職員や地域のボランティアの方々、そして地域のキーパーソンの方との信頼関係でした。日本人とザンビア人、地理的には遠く離れていても笑い合い、親しみをもって接し、互いをリスペクトしながら働いていること。診療所の職員やボランティアの方々に心から感謝し、貢献をたたえ、事業の将来を託すこと。キーパーソンの方と密にコミュニケーションをとり、NGOとしての意向を伝え理解を得ること。これらは日本で働く際には当たり前に見えることかもしれませんが、「途上国支援」という言葉から想像される「援助する者と援助を受ける者の関係」とは違った関係性がそこにありました。



振り返ってみれば、「国際協力」という世界について学ぶほど、次第に「ドナー側の利害関係の複雑さ」や「外国人ドナーと現地の人々の対立」などの問題に目が行き、「援助する者」と「援助を受ける者」の境界が明確な状態で問題を考えてしまっていることに気づきました。もちろん、明確に立場がわかる現場もあるかもしれませんが、単純なカテゴライズや支援に対する思い込みが、実情を把握する妨げになる場合もあるでしょう。事業地で精力的に活動する職員やボランティアの皆様の話を聞き、「援助を受ける者」は周囲の人々や「援助する者」をも助ける力をもっていること、現地で生きる人々の強さに目を向ける必要があることに、気づくことができました。



「マザーシェルター」の外壁

「国際協力」と一括りに言っても、実際は多様な分野で様々なアクターがそれぞれのかたちで協力を行っています。自分はどの立場で「国際協力」に携わるのか？ツアーの前も最中もずっと考えていましたが、今回ロシナンテスの皆様の姿を見て、大事なことに改めて気づくことができました。それは、

「国際協力」は一人や数人による一方的な活動で成り立っているわけではないということです。将来どんな機関や団体で活動するにせよ、「協力」であることを常に心にとめ、基盤にある自分と相手、また組織と組織の関係を大事にしながら仕事をしていきたいと強く思いました。

最後に、「国際協力」の根幹を考える機会を与えてくださったロシナンテスの皆様、細やかで臨機応変なご対応でツアーを快適にしてくださった道祖神様、ともに旅しともに楽しみ、様々な興味深いお話を聞かせてくださった参加者の皆様、本ツアーに携わってくださったすべての皆様に、厚く御礼申し上げます。

本記事をご覧の皆様に、アフリカやスタディーツアー、国際協力への興味が少しでも高まれば幸いです。お読みいただきましてありがとうございました。